

アメリカ学会会報

— The American Studies Newsletter —

No.190

April 2016

アメリカ研究者の社会的責任

松 田 武

漂流し続ける可能性が多いことを恐れます。心理的に(あくまで心の問題です)一度日米安保を切り、改めて日米安保を結び直す位の態度でないと流れに任せてしまうことになりましょう。

斎藤 眞, 1997 年

私たちは、急速なグローバル化と世界史的な構造変動の中で生きている。深刻度を増す地球規模の諸問題を抱える人類社会ならびに日本はこれからどうなるのか。近年頻発する痛ましいテロ事件を見聞きする度に、この問題は私たちの頭上に極めて重くのしかかる。

2016 年はアメリカ独立宣言の 240 周年にあたる。米国は、18 世紀のクレヴクール以来、専門家であるなしを問わず、国内外の人たちによって様々な角度から論じられてきた。それは、米国が数多くの人の注目を集め、彼らの想像力を駆り立てる魅力的存在であり続けたことを物語る。

米国は、移民や難民を世界各地から大量に受け入れ、「虐げられた人々」に人生の再挑戦の機会を提供する一方、世界の「余剰」人口や技術、知識、資金などを吸収することで国内経済はもとより世界経済も牽引してきた。米国はまた、人類の夢である多民族・多民族共生社会の実現をめざし、歴史上何度となく改革を進めてきたし、その実験は現在も途上にある。

このように 18 世紀末の誕生以来、世界中から影響を受け、与えもしてきた米国は、世界の人々にとってどのような意味を持ち、人類社会をどのように変えてきたのか。人類史全体から見て、米国は文明史上いかなる役割を果たし、また今後果たしていくのか。10 年後に独立 250 周年を迎えるのを機に、私たちアメリカ研究者は、たとえ試論の域を出なくとも、その答えを用意しておくことが求められているように思われる。蓄積された先人の研究を足掛かりに奮勇をふるって、米国を「総括」する必要があるのではないかな。

そのことは、おのずと「近代」とは何だったのかを問うことになり、未だに「過ぎ去ろうとしない近代」の諸価値をも問い直すことにもなる。近代の再検討という点では、この提言は何ら新しいものではない。なぜなら、研究対象を問わずこれまで多くの研究者が同様の問いを

発し、その答えを模索してきたからである。しかし、再度この「ラージ・クwestions」を問う呼びかけは、従来の単なる蒸し返しではない。それは、米国と世界の関係性を考察する一方、アメリカ史を世界史の文脈において捉え直すこと、アメリカ史を通史的に展望し、その現段階と世界史の現段階を同時に正しく把握することを私たち研究者に求めているからだ。

地域研究は、学際的な手法により特定地域の「現状」を全体的に理解することを主眼とする。その究極的な目的は、特定地域の理解にとどまらず、研究を通して得た知や理解を実践的に活用することにある。米国理解という知的好奇心の満足にとどまらず、理解と知を基に太平洋を挟んだ重要な隣国である米国とどう向き合い、どう付き合っていくかを追究することが、地域研究の一つでもあるアメリカ研究の究極目標といえよう。

米国のヘゲモニーは、戦後の世界秩序に一定の安定性をもたらした。その中で日本は、切言などを通して米国に自制を促し、曲がり形にも暴走を抑制するある種のメカニズムを持ち合わせていた。だが昨年の安保関連法の成立以来、見方によってはそれも失ってしまい、米国の望むままに行動せざるを得ない「危険な」状態にわが国をおいてしまった感が強い。

日米同盟の軍事的色彩が一段と濃くなった今日、日米両国民の出会いの原点に再び立ち帰り、これまで米国が日本国民にとってどのような価値を持ってきたか、そして今後はどのような意味を持つのかを改めて問い直す時機にあるように思われる。米国民の思想や心理の深層部にメスを入れ、これまでしばしば不問にされてきたアメリカン・リベラリズムや多様ななどの諸前提や固定観念を洗い直し、米国のどの部分が不易で、どこが変わっていくのかをじっくりと見極めることが不可欠かつ焦眉の急であると考ええる。

これら一連の問いの答えを追究することが、米国のヘゲモニーに代わる新しい世界秩序のあり方を突き止めることになるであろう。人類・地球社会の進むべき方向と私たち国民の「生きる意味」を考え直す上で、アメリカ研究者としての社会的責任をたえささやかでも果たすことにもなるのではなかろうか。

(京都外国語大学)

2016年 アメリカ学会第50回年次大会 プログラム

(会場が変更になりましたので、アメリカ学会 HP 上であらたに参加登録をお願いします。)

1. 開催日 2016年6月4日(土)、6月5日(日)
2. 会場 東京女子大学
〒167-8585 東京都杉並区善福寺 2-6-1
交通アクセス: <http://office.twcu.ac.jp/univ/access/>
キャンパスマップ: <http://office.twcu.ac.jp/univ/about/campus/map/>
会場校連絡先 小檜山ルイ (E-mail: rui@lab.twcu.ac.jp)
3. 受付 9号館ロビー
4. プログラム (報告要旨は大会会場で配布する【大会要項・報告要旨】に掲載します。)

第1日 6月4日(土)
午前の部 自由論題 9:30~12:00

【自由論題 A 人種・エスニシティー】 9号館 9104

司会: 麻生 享 志 (早稲田大学) 討論: 中 地 幸 (都留文科大学)
Eriko YAMAMOTO 山本恵里子 (Aichi Mizuho College 愛知みずほ大学)
“More than the ‘Race’ Issue: The 1936 Berlin Olympics and Japanese Americans”
Sanae NAKATANI 中 谷 早 苗 (Kansai Gaidai University 関西外国語大学)
“Emotional, Warm, and Humane: Minoru Yamasaki’s Architecture and Strategic Formation of His Professional Identity”
Edward K. CHAN (Waseda University 早稲田大学)
“Gloria Anzaldúa’s Model of Identity and Utopian Desire”
Yasuko KASE 加 瀬 保 子 (University of the Ryukyus 琉球大学)
“The Perfect Guest: Trauma and the Implicated Subject in *A Gesture Life* by Chang-Rae Lee”

【自由論題 B 文学と映画における帝国主義・新自由主義・民主主義】 9号館 9105

司会: 山 口 和 彦 (東京学芸大学) 討論: 渡邊真理子 (西九州大学)
柳 沢 秀 郎 (名城大学) 「フレデリック・ヘンリーの連合——帝国主義的日米対立と『武器よさらば』」
青 木 耕 平 (一橋大学・院) 「コーマック・マッカーシー『国境三部作』におけるメキシコ——北米自由貿易協定、麻薬カルテル、そして新自由主義」

【自由論題 C 移民政策・保守主義・米欧関係】 9号館 9201

司会: 上 村 直 樹 (南山大学) 討論: 倉 科 一 希 (広島市立大学)
鈴木 俊 弘 (一橋大学・院) 「米国における人種論の社会性——移民委員会報告書第5巻『人種民族辞典』(1911)における「アロフィリアン・ホワイト」の概念をめぐって」
森 山 貴 仁 (Florida State University フロリダ州立大学・院) 「保守を売り込む——アメリカにおける政治コンサルタントとメディア」
志田淳二郎 (中央大学・院) 「ジョージ・H・W・ブッシュ政権の再検討——冷戦終結期の米欧関係の文脈で」

【自由論題 D 冷戦・対抗文化・公民権運動】 9号館 9202

司会: 大 森 一 輝 (北海学園大学) 討論: 兼 子 歩 (明治大学)
青 砥 吉 隆 (国際基督教大学・研究員) 「アポロ 11 号が月面に残した銘板 “We came in peace for all mankind.” の訳出について」
藤 重 仁 子 (森ノ宮医療大学) 「アメリカにおける補完代替医療の「復興」と移民——鍼治療を事例として」
西 崎 緑 (福岡教育大学) 「公民権運動における YWCA の役割——YWCA of the USA Papers に残された記録を通して」

【自由論題 E 初期アメリカ・国際関係・文化外交】 9号館 9203

司会: 小山久美子 (長崎大学) 討論: 土 屋 由 香 (愛媛大)
笠 井 俊 和 (静岡県立大学・講) 「英領アメリカ植民地における航海法違反の実態——ボストン船の事例を中心に」
奥 田 俊 介 (京都大学・院) 「リンドン・ジョンソン政権の対アフリカ広報外交と国務省教育・文化局——1964~69 年」
William CHOU (University of Tokyo 東京大学・研究員) “Constructing the American Japanese Car: Technology, Consumer Markets, and Shocks 1957-1982”

【自由論題F 家族・ジェンダー・社交】 9号館 9204

司会：松原 宏之（立教大） 討論：佐々木真理（実践女子大学）

関口 洋平（University of Hawaii ハワイ大学・院）「イデオロギーとしてのポスト核家族と「イクメン」の誕生——20世紀後半アメリカにおける父親の表象について」

大塩真夕美（白百合女子大学）「Mrs. Astor と Marjorie Merriweather Post——19世紀と20世紀の社交界をそこに君臨した女性から比較する」

福田 敬子（青山学院大学）「アメリカ人芸術家のロンドン・クラブライフ——ヘンリー・ジェイムズを中心に」

昼食休憩 12:00～12:50

理事会・評議員会 12:05～12:50 9号館 9103

午後の部

アメリカ学会設立50周年記念シンポジウム

「アメリカ学会半世紀の省察と展望」 13:00～18:00 23号館 23101

司会 第二部まで 小檜山ルイ（東京女子大学）

第三部から 生井 英考（立教大学）

開会の辞・趣旨説明 松本 悠子（アメリカ学会会長/中央大学）

第一部 基調報告

報告者 中嶋 啓雄（大阪大学）

「歴史的視座から見たアメリカ学会」

渡辺 靖（慶應義塾大学）

「発足から50年——アメリカ学会の過去・現在・未来に関する若干の問題提起」

第二部 ラウンドテーブルI「これまでの半世紀から学びとる」

発言者 佐藤 宏子（アメリカ学会元会長/東京女子大学・名）

長田 豊臣（アメリカ学会元会長/学校法人立命館理事長）

油井大三郎（アメリカ学会元会長/東京大学・一橋大学・名）

有賀 夏紀（アメリカ学会元会長/埼玉大学・名）

古矢 旬（アメリカ学会元会長/北海商科大学）

中嶋 啓雄（大阪大学）

渡辺 靖（慶應義塾大学）

第三部 ラウンドテーブルII “Navigating American Studies in an Age of ‘Globalization’”

Speakers

Hiroschi OKAYAMA 岡山 裕（Keio University 慶應義塾大学）

Michio ARIMITSU 有光 道生（Keio University 慶應義塾大学）

Hiroschi KITAMURA 北村 洋（College of William and Mary）

Masumi IZUMI 和泉 真澄（Doshisha University 同志社大学）

Roger H. BROWN（Saitama University 埼玉大学）

Claudia Franziska BRÜHWILER（University of St. Gallen）

第四部 Concluding Remarks

Hyung Song LEE（President, ASAK/Hankuk University of Foreign Studies）

Yuko MATSUMOTO 松本 悠子（President, JAAS/Chuo University アメリカ学会会長/中央大学）

茶話会 18:30～19:45 11号館 2F カフェテリア

第2日 6月5日（日）

部会・Workshop 午前の部 9:00～11:30

【部会A 格差社会アメリカを再考する——経済・歴史研究者からの問い】 9号館 9104

司会 須藤 功（明治大学） 討論 本田 浩邦（獨協大学）

報告 大橋 陽（金城学院大学）

「低所得層の信用アクセスとフリンジバンキング」

佐藤千登勢（筑波大学）

「セーフティネットは機能しているのか？——福祉改革後のアメリカ」

中 島 釀（千葉商科大学） 「模索する労働運動——「ビジネス・ユニオニズム」から「社会運動ユニオニズム」へ」

【部会 B 拡張主義と環境】 9 号館 9103

司会 松 永 京 子（神戸市外国語大学） 討論 荒 こ の み（東京外国語大学・名）
報告 鎌 田 遵（亜細亜大学） 「アメリカ先住民と核開発」
加 藤 恵 理（成城大学・講） 「ハワイにおける外来種をめぐる議論」
山 城 新（琉球大学） 「アメリカ合衆国探検遠征隊と拡張主義」

【Workshop A Framing the “American Century”: Migrations across a Globalizing World I】 9 号館 9201

司会 Yoneyuki SUGITA 杉 田 米 行（JAAS/Osaka University 大阪大学）
報告 Krystyn R. MOON（ASA/University of Mary Washington）
“The Making of the Modern Visa: American Immigration Policies, Legal Entry, and the Body Politic, 1880s-1940s”
Madeline Y. HSU（OAH/University of Texas at Austin）
“Discrimination and Selection: A Brief Interpretation of U.S. Immigration Restriction”
Shiori Nomura ICHIMASA 一 政（野村）史 織（JAAS/Chuo University 中央大学）
“Discourses of Women on Birth Control and Childcare: Japanese Immigrant Women and the Japanese Immigrant Media in the Early 20th Century U.S.A.”
討論 Hyun-Song LEE（ASAK/Hankuk University of Foreign Studies）

昼食休憩 11:30～13:10

分科会 11:40～12:55 （内容については下記「分科会のご案内」をご参照ください。）

新理事会 12:30～13:00 9 号館 9103

総会 13:10～13:40 9 号館 9103

清水博賞・斎藤眞賞授賞式 13:50～14:00 9 号館 9103

部会・Workshop 午後の部 14:10～16:40

【部会 C オバマ政権の功績の評価】 9 号館 9103

司会 前 嶋 和 弘（上智大学） 討論 西 山 隆 行（成蹊大学）
報告 山 岸 敬 和（南山大学） 「オバマケアの歴史的意義」
佐 藤 丙 午（拓殖大学） 「米国の外交・安全保障戦略の継続性と断続性——リバランスと戦略的抑制がアジア太平洋に及ぼす影響を中心に」
渡 辺 将 人（北海道大学） 「オバマの時代と民主党——分極化の中で」

【部会 D 「ポスト・レイシャル」アメリカにおける「人種」】 9 号館 9104

司会 大 類 久 恵（津田塾大学） 討論 竹 沢 泰 子（京都大学）
報告 村 山 瑞 穂（愛知県立大学） 「カラーブラインド時代にいかに人種を語るのか——アジア系アメリカ文学の場合」
川 島 正 樹（南山大学） 「「ポスト・レイシャル」アメリカにおけるカラー・ライン再定義圧力の分析と都市部における問題解決努力の展望」
余 田 真 也（和光大学） 「ポストインディアン人の真正性——現代文学における先住民アイデンティティの考察」

【部会 E スーパーウーマンの表象】 9 号館 9105

司会 杉 山 直 子（日本女子大学） 討論 赤 尾 千 波（富山大学）
報告 山口ヨシ子（神奈川大学） 「異性装の冒険者——キャピトラー・ブラックとその姉妹たち」
大 串 尚 代（慶應義塾大学） 「ワンダー・ウーマンとは誰か？——スーパーヒロインと 20 世紀アメリカ」
小 澤 英 実（東京学芸大学） 「ファイナル・ガールズから怒れる女たちへ——映画のなかのスーパーヒロイン」

【Workshop B Framing the “American Century”: Migrations across a Globalizing World II】 9 号館 9201

司会 Yutaka SASAKI 佐 々 木 豊（JAAS/Kyoto University of Foreign Studies 京都外国語大学）
報告 Moustafa M. BAYOUMI（ASA/Brooklyn College, City University of New York）
“‘I was treated like a UPS package’: Migration in *Guantánamo Diary*, the American Slave Narrative, and the War on Terror”

Neil FOLEY (OAH/Southern Methodist University)

“Mexican Immigrants in the U.S. Army and U.S.-Mexico Diplomacy”

Yutaka NAKAMURA 中村 寛 (JAAS/Tama Art University 多摩美術大学)

“Migration and the Location of Violence: Reflections on the Narratives of African-American Muslim”

討論 Jeongsuk JOO (ASAK/Jungwon University)

5. 注意事項

- 1) 学会ホームページにて5月20日までに大会参加登録をお願いいたします。熊本県立大学での大会のために参加登録をされた方も、再度登録をお願いいたします。
- 2) 茶話会参加ご希望の方も大会参加登録ページにてお申し込みください。参加費(3,000円)は大会受付(9号館ロビー)にてお支払いください。
- 3) 年会費の当日払いは受け付けられませんのでご了承ください。
- 4) 非会員の大会参加費は1,000円です。会場受付にてお支払いください。
- 5) 昼食：学内のレストランは大会初日(6月4日)には営業していますが、授業がないため、対応人数に限りがあります。また、2日目(6月5日)は営業していません。4日、5日ともに、大学周辺の飲食店を利用されるか、コンビニやスーパーマーケットで各自弁当をご購入ください。
- 6) 第1日(6月4日)の理事会・評議員会、第2日(6月5日)の新理事会出席者のための弁当注文は中止することになりました。各自で昼食をご用意ください。
- 7) 会場までの交通アクセスについては、東京女子大学の「交通アクセス」ページをご覧ください。宿泊の予約も各自をお願いいたします。
- 8) パワーポイント利用：いずれの会場にもプロジェクターとスクリーンを用意いたしますが、コンピューターはありません。報告者でパワーポイントを利用される方は、ノートパソコンをご持参いただき、各自で動作確認を行ってください。プロジェクターとの接続コネクタの形状は「D-sub 15ピン」(一般的に使用されている形状)です。このタイプに対応していないパソコンをご利用の方は、コネクタもご持参ください。なお、マッキントッシュの新しい機種の場合、動作に不備が生じることがあり、PPTを使用できない可能性があります。PPTファイルをコピーしたiPadとコネクタをご持参いただくことをおすすめします。また、念のためPPTファイルをコピーしたUSBメモリーもご持参ください。

6. 会場案内

受付	9号館ロビー
書店等出展	9号館ロビー奥
会員用控室	9号館9102
本部スタッフ・役員控室	9号館9101
外国人ゲスト控室	23号館23100

6月4日(土)

午前 自由論題	9号館9104, 9105, 9201~9204
昼食時 理事会・評議員会	9号館9103
午後 アメリカ学会設立50周年記念シンポジウム	23号館23101
茶話会	11号館2Fカフェテリア

6月5日(土)

午前 部会およびワークショップ	9号館9103, 9104, 9201
昼食時 分科会	9号館9104, 9105, 9202~9205, 23号館23200, 23300
午後 新理事会	9号館9103
総会	9号館9103
授賞式	9号館9103
部会およびワークショップ	9号館9103, 9104, 9105, 9201

熊本県立大学への義援金募集について

第50回年次大会の開催予定校としてご尽力いただいた熊本県立大学は地震被害を受けており、4月末現在、いまだ授業を再開できない状況にあります。被災地の一日も早い復興をお祈りし、アメリカ学会は、会員のみなさま向けに以下のような義援金受入口座を開設するとともに、年次大会開催中、熊本地震義援金ボックスを設置することとしました。集まった義援金は熊本県立大学あてにお送りさせていただきます。ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

義援金受入口座

三井住友銀行 渋谷駅前支店 普通 3483887 「東京大学アメリカ学会 代表者 生井英考」

第50回年次大会 分科会のご案内 6月5日(日)11:40~12:55

* 会場は9号館9104, 9105, 9202~9205, 23号館23200, 23300です。部屋割りは事前参加登録者数に基づき決定します。

1. 「アメリカ政治」 責任者：西山隆行（成蹊大学）taka1765@gmail.com

報告：清原聖子（明治大学）「全米に広がるオンライン有権者登録制度——普及要因と意義」

オンライン有権者登録制度とは、従来ペーパーで行ってきた有権者登録をインターネット上で可能にする仕組みで、州法で州ごとにシステムを導入している。2002年にアリゾナ州で初めてオンライン有権者登録制度が導入されて以来、2016年2月現在30州が導入済みである。同制度が近年急速に全米に普及している背景には、費用効果が大きいこと、有権者の利便性向上、正確な有権者登録が可能と言ったメリットが考えられる。オバマ大統領が設置した選挙管理に関する大統領委員会による法的拘束力のない推薦も後押ししている。本報告では、1993年モーターボーター法との関連性に触れ、多くの州でオンライン有権者登録制度が導入されるようになってきた要因を明らかにして、インターネットを使った投票環境の整備という観点からその意義についても検討する。

2. 「アメリカ国際関係史研究」 責任者：藤本博（南山大学）hiroshif@nanzan-u.ac.jp

報告：上 英明（神奈川大学）「外交と人の移動の『衝突』——冷戦期における米・キューバ国交正常化交渉とその限界をめぐって」

オバマ大統領が隣国キューバとの対話の開始を発表して以来、米国とキューバの関係が新たに注目を集めていることもあり、本年は、米国・キューバ関係史を専門とされる上英明氏に報告をお願いする。昨年には1961年以来途切れていた国交が回復し、「冷戦の遺産」が清算されつつあると言われる。本報告は、この「冷戦の遺産」とはいったい何を意味したのかを問題関心に据えながら、両国政府が既に1970年代において国交正常化を模索していたことに着目し、米国・キューバの外交資料やインタビューなどを用い、対話が難航した原因を探究する。本報告は、対話の背景として、カーター政権の外交戦略、国務省とホワイトハウスの関係、カストロ政権の思惑などを扱い、その際、アフリカや中米カリブ地域をめぐる両国の地政学的・イデオロギー的対立にとどまらず、二国間関係において極めて重要な役割を担ったフロリダ州マイアミのキューバ人コミュニティの動きに焦点をあてる。

本報告では、国際関係史の研究動向における本研究の意義とともに、カーター大統領図書館やキューバ外務省史料館など、冷戦研究に欠かせない史料調査の状況についても言及いただく予定である。

3. 「日米関係」 責任者：末次俊之（専修大学）suetoshi007@gmail.com

報告：浅野一弘（札幌大学）「国務長官の対日観——ライスとヒラリーの回顧録をもとに」

かつて、駐日米国大使をつとめたマイク・マンスフィールドは、「日米関係は世界に類例をみない、もっとも重要な二国間関係である」と述べたことがある。しかしながら、このことばは、いまなおあてはまるのであろうか。

そこで、本報告では、米国務長官をつとめたコンドリーザ・ライスとヒラリー・クリントンの回顧録に着目し、2人の対日観を紹介したいと考えている。この2人をとりあげるのは、『ヒラリーとライス——アメリカを動かす女たちの素顔』（岸本裕紀子著）や『ヒラリー vs. ライス——次期アメリカ合衆国大統領をめぐる闘い』（ディック・モリス＝アイリーン・マクガン著）などの著作にみられるように、両者が比較されることが多いからであり、直近の国務長官をつとめていたからである。

また、本報告では、日本側のメディアの報道についても留意したい。というのは、日本側で伝えられているほど、この2人が日米関係を重視していなかった様子が、回顧録からはうかがいしれるからである。

4. 「経済・経済史」 責任者：名和洋人（名城大学）nawa@meijo-u.ac.jp

報告：安岡邦浩（京都大学・院）「大企業規制とニューディール」

本報告は政府による大企業規制のあり方に対し、ニューディール政策が与えた影響について考察するものである。ニューディール政策は政治・経済・社会構造改革を目指した政策の総称であるが、初期の不況対策に対する対応（AAA・NIRA）などに主に関心が向けられてきた。このため後期に目標とされた活発な競争を通じた経済活性化とその手段たる反トラスト法の運用については軽視される傾向にある。しかし、後期ニューディール政策が大企業規制に与えた影響は非常に大きいものである。実際に有数の大企業が相次いで特許と技術（AT&T：トランジスタ、IBM：パンチカード、Kodak：カラー写真の現像など）を開放させられているからである。上記の様な認識の下、本報告では停滞していたとされる反トラスト法の復活劇とその契機となったニューディール政策を競争政策史の観点から考察する。

5. 「アジア系アメリカ研究」 責任者：野崎京子（京都産業大学）nozaki@cc.kyoto-su.ac.jp

報告：坂口満宏（京都女子大学）「北米に渡った熊本県からの移民と郷里とのつながり」

熊本県からの海外移民は、ハワイ官約移民に始まり、移民会社の時代になるとメキシコやペルー、アメリカ本土へと広がり、1924年にアメリカ合衆国への移民が禁止されるとブラジルへと推移していった。そして1930年頃になると移民数において広島県を上回り、沖縄と並んで全国一位となっていた——よく知られていることである。では、こうした移民は熊本のどこの村からいつ頃、どのようにして海外に渡り、移民先でどのような生活を営んでいたのだろうか——。残念なことに熊本県からの海外移民の歴史については全くといっていいほど未整理であり、明らかにされていない。

いのが現状である。本報告ではこうした現状を打破するという目的のもと、1920～30年代の熊本海外協会の『会報』を基礎資料とし、北米に組織された海外協会支部と郷里との結びつき、農地改革と在米の不在地主問題等を糸口に、熊本県からの海外移民を考える糸口を提案したいと思う。

6. 「アメリカ女性史・ジェンダー研究」 責任者：山内恵（清泉女子大学・講）ymucm@sannet.ne.jp

報 告：鈴木周太郎（鶴見大学）「アメリカ建国期における英仏関係と女性の権利論」

本報告では1790年代アメリカにおいて、イギリスやフランスとの外交問題が市民にとっての関心事となり、さらにそれが「女性の権利」についての議論にも大きな影響をおよぼしたことを検討する。ジェイ条約、海賊問題、フランス王妃の処刑といった事柄が、アメリカのジェンダー秩序を動揺させていった過程を検討する。特にマシュー・ケアリーによる『アルジェについての考察』やスザンナ・ローソンによる劇『アルジェの奴隷』を考察し、海賊問題がその背後にいとされたイギリスへのアメリカ人の敵対感情を増幅させ、それがこの時代に頻繁に議論されるようになった「女性の権利」論と結びついていった経緯を明らかにする。フィラデルフィアの出版人ケアリーがローソンやメアリー・ウルストンクラフトの著作の出版を通して親仏反英の感情を煽りつつ、その結果「女性の権利」についての市民の共感の喚起に繋がったことを論ずる。

7. 「アメリカ先住民研究」 責任者：佐藤円（大妻女子大学）mdsato@otsuma.ac.jp

報 告：大野あずさ（大阪経済大学）「歴史学者として現代の都市アメリカ先住民コミュニティを研究するということ」

報告者は、2014年8月から1年間、在外研究でコロラド大学デンバー校歴史学部に客員教授として籍を置き、現地の先住民コミュニティでインタビューならびにフィールドワークを中心とする調査研究を実施した。また、その間研究対象とするコミュニティで行われていた文化行事や抗議運動などに参加し、デンバーの先住民コミュニティでその当時起きていた出来事を日常的に体験する機会を得た。本報告では、特にこの在外研究中に取り組み始めた新たな研究テーマ（先住民児童の養子縁組、アルコール依存症とホームレス問題）について紹介したい。また、在外研究中の経験を踏まえ、これまで第二次大戦以降のアメリカ先住民現代史を研究してきた報告者が、「過去」ではなく、「現在」の都市先住民が直面する問題をテーマとした研究に取り組むようになった経緯を説明したうえで、その問題点についても検討を加えてみたい。

8. 「初期アメリカ」 責任者：石川敬史（東京理科大学）takafumi@rs.kagu.tus.ac.jp

報 告：朝立康太郎（西南学院大学）「南部奴隷主層による「政治経済学」批判」

本報告では、主として1830年代以降に南部奴隷主層が唱えた自身のセクションに関する様々な擁護論について、これを同時期に出現しつつあった「自由な社会」とその「政治経済学（Political Economy）」に対する批判という視点から検討することで、やがて内戦に帰結する南部奴隷主層のイデオロギーの歴史的意味を探ってみたい。

周知のように、19世紀前半のアメリカ合衆国は、領土の急速な拡張と「市場革命」の概念で表象される経済発展に伴い、セクションの形成を経験した時代であった。この渦中で注目すべきは、各セクションにおいて「自由な社会」が生み出した諸原理への対応が模索されたことである。従来、自由貿易の推進や奴隷制プランテーションへの集中的な資本投下などを特徴として指摘されてきた奴隷主寡頭支配は、「自由な社会」をどのように吟味し、また対応しようとしたのであろうか。本報告ではその歴史性に注目しつつ考えてみたい。

9. 「アメリカ社会と人種」 責任者：藤永康政（山口大学）yfujinag@gmail.com

報 告：戸田山祐（神奈川大学・講）「メキシコ人非法移民の包摂と排除——1950年代前半のテキサスにおける送還と合法化」

1950年代初頭から、メキシコからの非法移民が合衆国内で問題視されるようになり、1954年には大規模な摘発と送還が実施された。本報告では、非法移民の雇用がとりわけ大規模におこなわれていたテキサスにおいて、摘発と送還が同州の地域社会に及ぼした影響をもちろしたのかを検討する。ここで注目するのは、非法移民の送還の猶予および滞在・就労資格の正規化をめぐる、「アングロ」の雇用主、メキシコ系アメリカ人およびメキシコ人非法移民労働者のあいだのせめぎ合いと、テキサス州政府や州内の民間団体が非法移民とその家族を対象に実施した援助策である。これらの分析を通じて、同時期のテキサスにおける「人種」・エスニシティ・シティズンシップの境界について考察するとともに、非法移民の包摂・合法化と排除・送還という、今日の合衆国でも関心を集めている問題について、歴史的な文脈をふまえて再考したい。

第51回年次大会企画・報告募集のお知らせ

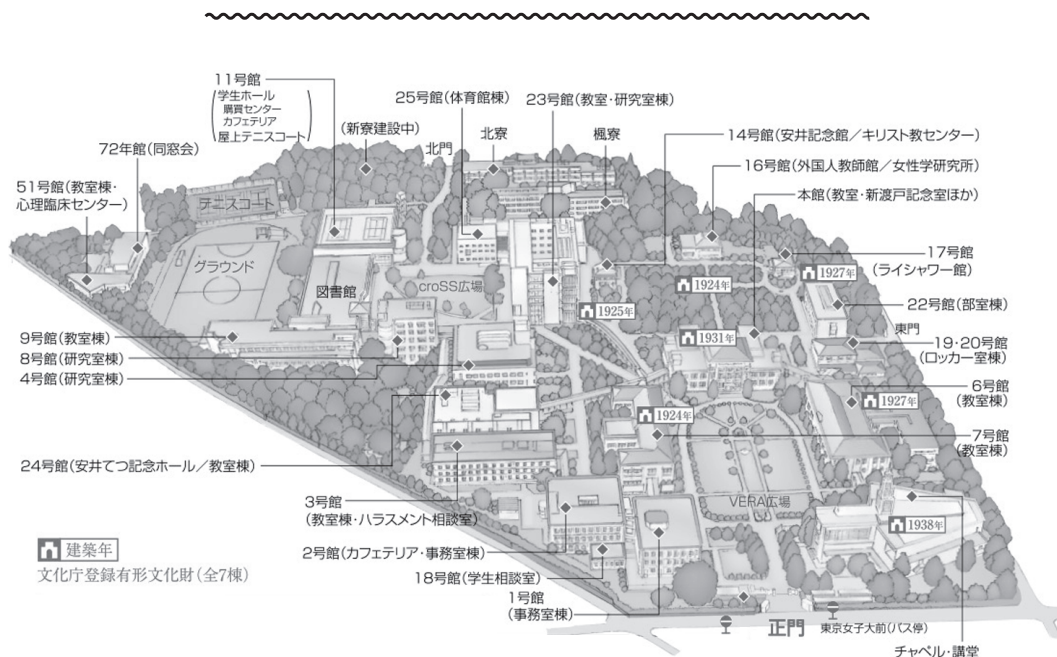
日本アメリカ学会第51回年次大会は、2017年6月に早稲田大学にて開催いたします。会場・日程の詳細は、次号以降の会報にてお知らせいたします。

第51回年次大会での自由論題報告と部会企画提案を下記の通り募集します。会員のみならずからの積極的な応募をお待ちしております。すべての応募は年次大会企画委員会<taikai@jaas.gr.jp>宛に、1～3のうち該当する件名を明記し、それぞれの締切日厳守でお申し込みください。

1. 「自由論題報告申し込み」(締切日:11月20日)
報告テーマ、1,500字程度の要旨、およびキーワード5つを記載。自由論題での報告は会員に限られます。非会員による申し込みは、締め切り日までに入会手続きを行っている場合のみ、応募内容を暫定的に受理し、入会が認められた時点で正式に審査対象とします。報告者には2017年5月15日までにペーパー(和文の場合8,000字～12,000字、英文の場合は5,000～7,500 words程度)を提出していただき、学会のホームページに掲載します。学会員にはパスワードを通知し、年次大会の前後2週間のみペーパーを公開します。大会当日の報告時間は20分、報告は2年連続を上限とします。なお、報告内容は未発表のものとし、応募者多数の場合は要旨に基づく選考を行うことがあります。また、英語での報告の場合は、要旨・タイトルは英語としてください。
2. 「部会の企画提案」(締切日:9月6日)
部会のテーマおよび800字程度の要旨。報告者案があれば合わせてご提案ください。部会の企画に関しては、以下の申しあわせ事項にご留意ください。第49・50回大会の部会・シンポジウム・ワークショップでの報告者は、第51回大会の部会では報告できません。司会者、討論者としての応募も原則避けてください。登壇者の過半数は学会員であることとします。司会者には大会までの連絡調整などをお願いするため、原則学会員としてください。非会員の部会登壇者に対して、学会から謝金・交通費などは支払われませんので、ご了承ください。また、登壇者の構成については、ジェンダーや地域のバランスに配慮して下さい。学際性のある企画を歓迎しますが、必ずしもそれを条件とはいたしません。
3. 「分科会開催申し込み」(締切日:8月31日)
新規の場合は、分科会趣旨(400字以内)と、連絡責任者および賛同者5名の氏名をお知らせ下さい。継続の場合にも、分科会責任者氏名を添えて、継続する旨をご連絡ください。

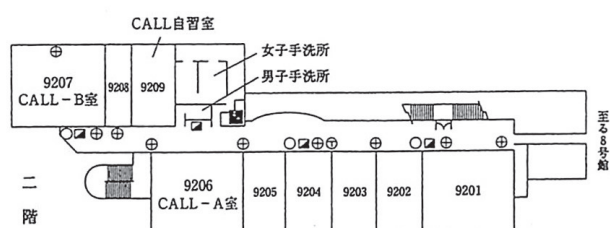
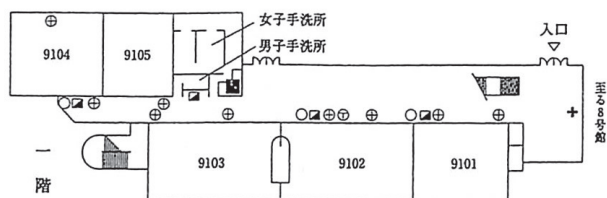
なお、全ての企画内容の最終決定は、年次大会企画委員会の提案に基づいて常務理事会で行います。応募された内容に関して調整をさせていただく場合があることを、あらかじめご了解ください。

年次大会企画委員会

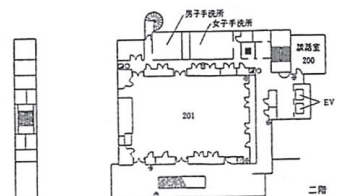
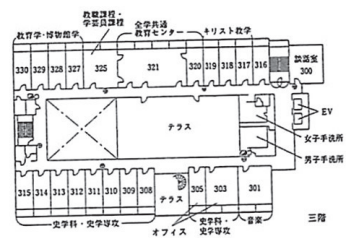
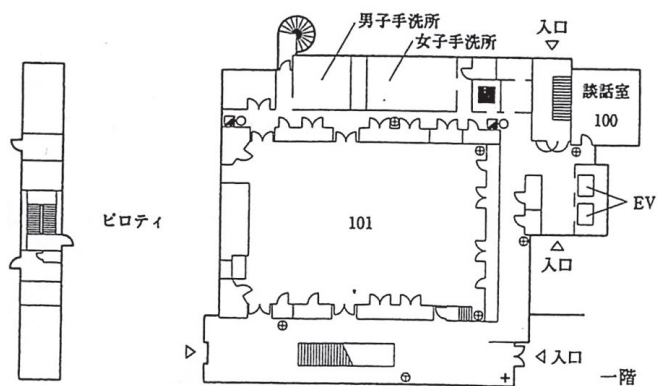


東京女子大学キャンパスマップ

9号館



23号館 (教室・研究室棟)



『アメリカ研究』第51号「特集論文」募集のお知らせ

『アメリカ研究』第51号の特集テーマ「ゆらぐアメリカの自画像」の趣旨は以下の通りです。

現在のアメリカは、自らの姿をめぐる混乱と対立の時代にある。「腐敗」したヨーロッパとの相違を強調する例外主義を特徴とするアメリカの自画像は、もはや保持できなくなっている。世界各地からの移民の増加とアジア諸国の経済成長は、アメリカとヨーロッパの関係を大きく変えつつある。中東のイスラム圏に深く介入したアメリカは、現地のイスラム社会との間に大きな摩擦を生み、各地でテロが繰り返される状況を生んでいる。さらに中国などが台頭する近年、アメリカは20世紀後半のように圧倒的な超大国としての地位を失い、自国の特殊性を証明することが難しくなっている。

その一方でアメリカには、依然として従来の自画像に執着しようとする声もある。現在の共和党大統領予備選挙で、過激な移民排斥政策などを繰り返すトランプが人気を集めていることは、アメリカの変化を嫌う傾向があることを示している。アメリカの自己認識に変更を迫る変化と、変化に抵抗しようとする運動の狭間で、アメリカの自画像が政治的な争点になることも予想される。

そこで特集では、現在に至るアメリカの自画像とその変容に関連する論文を広く募集する。大西洋、太平洋といった地勢概念を境界づけと対比化の機能から解き放って、相互浸透的な関係性から捉えなおしてみることや、クレヴクルの有名な問いを起源に措定することで「アメリカ性」なるものの独自の自己展開の軌跡として論じられてきたアメリカ論・アメリカ人論を、この起源言説が示唆するハイブリッド性に眼を転じて再構築してみることなど、文化研究の側からの問題提起も待たれる。歴史研究においても、ターナーのフロンティア理論に代表される、愛国心と結びついた例外主義的な歴史解釈から距離をおき、マイノリティの視点やトランスナショナルな歴史枠組を提示する新たな研究が進んできた。例外主義を超えだした時代におけるアメリカの自画像の揺らぎの位相にこそ着目することで、新しいアメリカ研究の成果が生み出されてくることを期待したい。

*「特集」に応募希望の会員は、2016年6月末日までに、氏名・所属・論文題目および構想・資料などの説明（400字程度）を電子メール（nenpo@jaas.gr.jp）で、年報編集委員会宛てにお申し込み下さい。その際のタイトルは『『アメリカ研究』特集応募』と明記してください。執筆要項は学会ウェブサイト参照のこと。

<http://www.cis-trans.org/jaas11/index.html> 原稿締め切りは2016年9月26日（月）当日消印可

『アメリカ研究』第51号「自由投稿論文」募集のお知らせ

学会機関誌『アメリカ研究』（年報）は2017年3月に第51号を刊行する予定です。会員諸氏の積極的な投稿をお待ちしています。

1. 内容 アメリカ研究に関する未発表論文、もしくは進行中の研究ノート。前年度『アメリカ研究』もしくは『英文ジャーナル』に論文・研究ノートが掲載された方は、本年度の投稿をご遠慮ください。また、同じ年度、あるいは年度をまたいで『アメリカ研究』と『英文ジャーナル』の双方に投稿することはできません。これはなるべく多くの会員に発表の機会を提供するためです。
2. 枚数 論文は33字×34行のレイアウトで19ページ以内（註を含む）。研究ノートは同形式で8ページ以内。執筆要項は学会ウェブサイト参照のこと。
<http://www.cis-trans.org/jaas11/index.html>
3. 原稿締め切り 2016年9月26日（月）当日消印可
4. 提出部数 3部（コピー）提出原稿は不採用の場合も返却いたしません。

*投稿希望者は、論文題目を2016年6月末日までに電子メール（nenpo@jaas.gr.jp）で、年報編集委員会宛てにお申し込みください。

会員みなさまにお願い

ご住所・所属等の変更が生じた場合には、速やかに事務局<office@jaas.gr.jp>までお知らせください。また、メールアドレスを登録されていない方は、極力ご登録くださいますようお願いいたします。

事務局

アメリカ学会海外渡航奨励金 — 国外の学会やシンポジウムで発表する方を対象とする助成制度のご案内 —

このたびアメリカ学会では、国外での学会やシンポジウムにて発表する方を対象に、以下の要領で渡航奨励金を支給することになりました。本制度による給付を希望する方は積極的にご応募ください。

1. 応募資格：
 - ① アメリカ学会の会員であること。
 - ② 国際学会やシンポジウムでの発表時に、日本の高等教育機関または研究機関に在籍すること。
 - ③ 国際学会やシンポジウムでの発表時に、日本に在住し、日本からの旅費を要すること。
 - ④ 申請では大学院への在籍、専任職の有無を問わないが、選考では大学院博士課程在籍者、日本の大学・研究機関で専任職についていない者を、この順で優先するものとする
2. 応募条件：
 - ① American Studies Association, American Studies Association of Korea, Organization of American Historians のいずれかの年次大会で発表する方を優先する。上記以外の国際学会やシンポジウムで発表する場合は、その学会が助成の対象として適切かどうかを国際委員会で審査する。適切と判断された場合に申請を受け入れるものとする。
 - ② 発表内容がアメリカ研究に関するものであること。
 - ③ 6月16日から30日までに応募すること。給付枠は若干名とする。
3. 応募方法、結果発表、発表後の提出書類
 - ① 次の書類を上記期間に、国際委員会 (kokusai@jaas.gr.jp) 宛に送ること。応募メールの件名を「JAAS 海外渡航奨励金応募」と明記すること。
 - (1) 履歴書
 - (2) 業績書
 - (3) 発表が受け入れられたことを証明する文書（電子メール可）
 - (4) 発表のタイトルと要旨（英語で250-300語程度とする）。
 - (5) (ASA, ASAK, OAH) 以外での発表の場合のみ）当該国際学会やシンポジウムに関する情報（目的、歴史、規模等、字数は指定しないが、簡潔で正確であること）
 - (6) 他組織からの援助のないものを原則として優先するので、申請時にほかの組織による援助を申請中か、あるいは援助を受けることが決定したものは、業績書にその旨明記すること。
 - ② 審査結果は、前期は7月中、後期は1月中に応募者に通知し、学会HPで公表する。
 - ③ 発表終了後に報告書（邦語1200字程度あるいは英語500語程度とする）および領収書（旅費・宿泊費）を提出すること。
4. 支給額

アジア圏の場合は一人5万円、アジア圏外の場合は一人10万円を原則とする。

国際委員会 (kokusai@jaas.gr.jp)

日米友好基金による旅費・滞在費補助金の受給者について 2016年OAH大会

2016年4月にプロヴィデンスで開催されるOAH年次大会に参加する、米国留学中の大学院生を対象とする旅費・滞在費補助金の受給者は、以下の3名に決まりました。

大鳥由香子さん (Harvard University)
奥 広 啓 太さん (University at Albany, State University of New York)
遠 藤 寛 文さん (State University of New York at Stony Brook)

おめでとうございます。

国際委員会

新刊紹介

鈴木元子 著

『ソール・ペローと「階級」——ユダヤ系主人公の階級上昇と意識の揺らぎ』

(彩流社, 2014 年, 4,320 円)

本書は、2015 年に生誕 100 年を迎えたユダヤ系アメリカ人作家ソール・ペロー (1915-2005) について、『ユダヤ系移民第 2 世代』であることが彼の文学に多大な影響を与えているとの仮説から、(中略) 主人公たちの『社会移動』に伴う階級及び階級意識』を切り口として、主要な 14 作品を、その背景となる状況を多面的かつ詳細に解説しながら論じたものである。

全体は 5 章から構成され、*Dangling Man* (1944) から *Ravelstein* (2000) までの 14 作品が、第 1 章「階級意識の揺らぎ」、第 2 章「階級の下降」、第 3 章「階級上昇の拒否」、第 4 章「階級の上昇と苦悩」、第 5 章「脱階級」というテーマのもとに分類されている。以下、とくに興味深い箇所を紹介する。第 1 章では「主人公の階級意識の揺らぎが、プロットを動かしている、たとえば第 3 節で取り上げられる *Henderson, the Rain King* (1959) では、「エチオピア帝国の封建時代における三つの階級を象徴」する動物と接触した主人公ヘンダソンが「社会・精神界における階段を一段一段上がっていった」と解釈される。第 2 章では第 1 節で主人公の「階級の下降」を扱った代表作ともいえる *Seize the Day* (1956) が取り上げられるが、この「下降」が「ユダヤ流の視点」に立つなら「感情豊かな無垢な人間」としての主人公像を浮き彫りにすることになると指摘される。第 3 章では、第 1 節で *The Adventures of Augie March* (1953) の主人公について、「社会の各階層を移動しながら、自分が納得してから次に移るといった様子で、(中略) 自分らしく中産階級として暮らしていける道を模索」していると分析される。さらに第 4 章では、第 2 節で取り上げられる *The Bellarosa Connection* (1989) の主要な 3 人の登場人物を『「階級」という視座から分析』した場合、3 人が「新興成金」という共通項を持つ点が指摘され、階級の上昇が彼らのユダヤ性を揺るがすと説明される。第 5 章では、第 3 節でペロー最後の長編 *Ravelstein* (2000) について、有名教授ラヴェルスタインが「カリスマ性を備えた将軍、すでに階級の枠を超えたユダヤ人の王」として描かれているとの解釈が示される。

このように、本書は「社会移動」の視点からの分析により、自らを「歴史家」とも称したペローの作品の特徴ともいえる側面、つまりユダヤ系移民 2 世による私的アメリカ社会史としての側面を浮かび上がらせている。

最後に本書の魅力について述べておきたい。本書では読者のテキスト理解に対して最大限の配慮がなされていて、作者ペロー自身に関する詳細な情報、作品の舞台に設定されている場所、および該当する時代背景に関する説明が先行研究への適切な言及とともに十分に付されている。豊かな色彩を帯びた形で提示される各作品の世界は、改めて読者をテキストに向かわせるに違いない。

大場昌子 (日本女子大学)

相本資子 著

『ドメスティック・イデオロギーへの挑戦——一九世紀アメリカ女性作家を再読する』

(英宝社, 2015 年, 2,720 円)

もし 19 世紀米国の中流階級における「家庭性」の理念が、女性を家庭内に留める強力な文化規範として機能し、社会に男女の領域分離を出現させたのなら、彼女たちは「家庭性」の要請する文化的・社会的境界をいかに乗り越えようとしたのか。この問いに答えるべく、文筆によって「分かれた領域」に挑戦した女性たちを取り上げ、その作品の再読を試みるのが本書である。読者は一年前に上梓された、倉橋洋子ほか編『越境する女——19 世紀アメリカ女性作家たちの挑戦——』(開文社出版) を想起されるかもしれない。『越境する女』の関心が米国から世界へと開かれた広大な地政学的射程にあるのに対し、本書は南北戦争後のニューイングランドで活躍した女性作家に焦点を合わせ、そのテキストを丹念に読み解いている。

本書は、前半部「ドメスティック・スペースの女性たち」と後半部「パブリック・スペースの女性たち」の二部・十二章で構成されている。第一章はビーチャーの家事指南書が分析され、テキストで衝突する修辞の分析を通じて、彼女の「家庭性」にフェミニズムとの融合を看取する。続く第二章と第三章は、ストウの『オールドタウンのんびりと』に守旧的なカルヴィニズムから脱却する家庭の価値観と「女性の領域」の拡大を見だし、フェルプスの『かすかに開かれた扉』とオルcott の『若草物語』にも、同様の力動を認める。そして、地方主義文学作品 (ストウ『オア島の真珠』、フリーマン『ペンブロック』、ジュイット『尖った樅の木の家』) の再評価を試みる第四章から第六章は、これらのテキストがニューイングランドの地域性を描きながら、女性たちの「分かれた領域」の越境という革新性を潜ませたと指摘する。

後半部は分析対象が「公的空間」へと移行する。第七章にてローウェルの女工たちの労働経験が検証されたのち、第八章から第十章にて興味深い「女性労働文学」論が展開する。オルcott の『仕事』からフリーマンの『労苦の報い』にいたる四作品において、主人公たちは「真の女性」像と葛藤しつつ、私的空間と公的空間が交差・融合する領域での別なる生き方を提示する。そして、三冊の女性医師物語を扱う最後の二章では、女性医師を「家庭の天使」に留めたハウエルズの小説との対比から、フェルプスの『ドクター・ゼイ』やジュイットの『いなか医師』の専門職たる女性医師像が着目される。1880 年代から 90 年代の女性医師の急増を背景とした作品において、社会的職能をもって「分かれた領域」に挑む女性の姿を見出そうとする論点は秀抜だ。

本書で再読された女性作家たちは、感傷小説からリアリズム文学への「橋にすぎない」(iv) ゆえに、注目から外れてきたという。しかし、そのジャンルの揺らぎこそが当時の白人女性 (作家) たちの文化規範への挑戦方法であり、「家庭性」の視座からその挑戦を浮き彫りにした本書の意義は大きい。

増田久美子 (駿河台大学)

石井 修 著

『覇権の翳り——米国のアジア政策とは何だったのか』

(柏書房, 2015 年, 6,480 円)

「米中和解」、「沖縄返還」、「日米繊維交渉」が象徴するように、ニクソン政権期の東アジア政策はとりわけ機密性が高いものであった。本書はそのような問題について、日本の外交史研究の第一人者が膨大な一次資料に依拠して考察したものである。米国外交文書 FRUS (*Foreign Relations of the United States*) の *Japan, 1969–1972, Volume XIX, Part 2* の公開が遅れていることを鑑みると、本書のアメリカ外交史研究における貢献は極めて大きい。

本書は「序章米国の覇権と「冷戦」秩序」と終章の代わりとなる「補遺ニクソン文書と大統領図書館」を含めた全 13 章から構成されている。「第 1 章 “ニクシンジャー” 外交の始動」「第 2 章ニクソン政権下の NSC」「第 3 章ニクソン政権の核戦略」では、ニクソン政権が登場した時代背景やニクソン政権の外交課題など、ニクソン政権期の外交政策の大枠を考察している。そして「第 4 章ニクソンの「チャイナ・イニシアティヴ」」「第 5 章ニクソン訪中」「第 6 章ニクソン訪中後の米中関係（一九七二–七四年）」「第 7 章第二次日米繊維紛争（一九六九–七一年）一迷走の一〇〇〇日」「第 8 章 NSC 文書に見る日本と東アジア」「第 9 章佐藤＝ニクソンの時代 (1)」「第 10 章佐藤＝ニクソンの時代 (2)」「第 11 章田中＝ニクソンの時代」の計 8 章に渡ってニクソン政権の対東アジア政策を考察している。

本書の構成や副題からも明らかなように、本書の最大の意義は一次資料に依拠してニクソン政権の東アジア政策を分析していることである。だが本書の特徴はその点に留まるものではなく、むしろニクソン政権の東アジア政策をより大きな文脈の中に位置付けている点にもある。とりわけ以下の三点を指摘したい。

一点目は、戦後の国際関係史を「米ソ二極体制」ではなく「覇権国」としてのアメリカと「挑戦国」としてのソ連の関係として描写している点である。そして本書の焦点であるニクソン政権期を、覇権に揺らぎに対する「retrenchment（縮小再編・建て直し）」の時代と位置付けている。

また「retrenchment」の一環としてニクソン政権が実施した二つの再編・修正が考察されている点も本書の特徴である。一つ目は、大統領主導の外交政策を構築するために実施した NSC（国家安全保障会議）の再編であり、二つ目は、米ソ相互確証破壊の状態下では拡大抑止の信憑性が損なわれるという認識の下で実施された対兵力戦略への修正である。

最後に、近年各国の新しい資料の公開に伴って冷戦史研究が著しく発展し、分析対象としてのアメリカが相対化されているなかで、冷戦の主役であるアメリカの対外政策の考察が依然として重要であるということを本書から読み取ることができる。

竹本周平（国際教養大学）

西山智則 著

『恐怖の君臨——疫病・テロ・畸形のアメリカ映画』

(森話社, 2013 年, 3,456 円)

本書は、エドガー・アラン・ポーを中心としたアメリカ小説および映画論を専門とする著者による初の単著である。著者は、古典的名作を始め自ら「超低級」といって憚らない作品群に至るまで、数々の映画作品を組上に載せ、目を背けつつも横目で眺めずにはられない人間の暗部を詳らかにしてゆく。そしてその暗部は先住民に対する侵略によって成立し、奴隷制を基盤として発展を遂げたアメリカの国家的恥部へと接続される。本書の試みは、大衆娯楽としての映画分析を通じ、2001 年の同時多発テロ以後、現在も続くイスラムという仮想敵との戦いによって自らのアイデンティティを再確認しているかのようにも見える大国アメリカを苛む恐怖を明らかにすることである。

本書は三部構成で、序章を除き全九章から成っている。第一部「疾病」では、人から人へ感染する病を軸に、アメリカの他者恐怖を暴いてゆく。第一章で感染症を主題としたパニック映画作品群と『ドラキュラ』を扱い、第二章で、他者（同性愛者・黒人・女性）の病としてのエイズ表象を考察したうえで、第三章「フィルムの帝国と物語の暴力」では、『エクソシスト』を始めとした悪魔祓いものやゾンビ映画の分析を通じ、侵略の危機に晒される「家」としてのアメリカ国家の自己イメージを喝破する。

本書に通底する 9.11 以後の問題意識が鮮明に打ち出されているのが第二部「テロ」である。第四章では、「モルグ街の殺人」から、『キング・コング』、そしてディンラディンへと継承される「叛逆する猿（＝人種的他者）」のイメージに迫り、ポー研究者としての本領を発揮する。そして第五章でスプラッターものを中心にハリウッド映画における殺人鬼の系譜を見渡しつつ、極めて映画的であった 9.11 のテロが現実と模倣の関係を転倒させたことを指摘し、第六章で、『サイコ』分析から発展し、被害者としてトラウマを語ることへの国家的欲望を浮き彫りにする。

第三部「畸形」で扱うのは、身体を巡る人間の歪な欲望である。第七章で、マイケル・ジャクソンを 19 世紀のフリーク・ショーおよび同時代の文学に横溢した人種間の境界侵犯の恐怖の文脈から読み解き、第八章では現代日本映画に主眼を移し SM 作品における痛みの美学を見据え、第九章では、捕囚体験記にその原型を見出しつつ『エイリアン』シリーズを SF 的フェミニズムの観点から論じている。

近代に成立し、歴史の古い国のような神話を持たないアメリカでは、映画による物語が神話として機能してきた（129 頁）という著者の言葉にもあるように、神話としての映画は国家の光の側面を語り、そしてその輝かしさは、必然的に闇の側面と背中合わせになっている。敢えて語られぬ闇の部分に目を凝らし、アメリカの起源と行く末を問い直す本書は、アメリカ映画を、ひいてはアメリカという国家そのものを語る上で必読の一冊である。

細野香里（日本学術振興会特別研究員）

川島正樹 著

『アフーマティヴ・アクションの行方
——過去と未来に向き合うアメリカ』

(名古屋大学出版会, 2014 年, 3,456 円)

本書は、アメリカ合衆国（以下、アメリカ）のアフーマティヴ・アクション（以下、AA）の歴史的歩みを紐解く概説書である。より大きくは、「（社会的）公正（fairness）の追求」という視点から、いかなるアメリカ史像が可能かを問う試みといえる。

副題に「過去と未来に向き合う」とあるが、その含意はこう整理できる。1960 年代ジョンソン政権が「貧困との戦い」の中で当初意図した AA は、「過去の不正の清算」、特に奴隷制とジム・クロウという最も過酷な「人種」差別を被ってきた黒人に対する広範な「資源再配分」にあった。公正は「結果の平等」と認識された。しかし、1970 年代ニクソン政権とそれ以降は、AA を高等教育と雇用での「優先枠」に限定すると共に、AA の目的を「未来の多様性の確保」に転換した。社会環境も変化した。多文化主義が称揚される中で黒人問題の重要性は相対的に低下した。市場原理が叫ばれ、自由を制限する恐れのある「結果の平等」の排除こそ公正だとする認識が広がった。「人種」「公的政策」「自己責任」に関わる公正認識をめぐる 1960 年代と 1970 年代以降との間に生じた齟齬、これが AA の議論を錯綜させる基底要因を成してきた。しかし、この難局を乗り越え公正認識の共通基盤を生み出す努力が求められており、そのために「未来に向き合う」ことも可能になる。

本書は副題に呼応する形で二部構成となっている。第一部「歴史的前提」は、英領植民地時代から 1960 年代までを概観し、AA の歴史的背景を確認する。第一章は「人種」概念の検討、第二章は「人種」偏見の構築過程の整理、第三章は南北戦争後に北部も含めジム・クロウが是認される「謎」の解明、そして第四章は冷戦の評価と 1960 年代市民権運動の意義へと進む。第二部「未来への試み」は、ジョンソン政権から現在に至る AA をめぐる動きを考察し将来を展望する。第五章はアメリカの保守化と AA の変質過程の分析、第六章は黒人エリートの郊外化と「アンダークラス」の苦境の再検討、第七章は「逆差別」論争で生じた AA の目的転換と「カラーブラインド」論の吟味、そして第八章は AA 廃止の動きを契機とする黒人活動家の賠償請求運動とゲットー再生を目指す自助努力の評価にあてられる。

本書が扱う論点は多岐にわたる。概説書であるため、各論点について詳細な議論にまでは踏み込んでいない。それを補うため巻末には文献案内が載せられている。各章につき 25 前後の文献が解説と共に紹介されており、各論点の本格的な研究への手がかりを提供してくれる。本書は次世代を担う若手研究者へのメッセージであり問題提起である、と著者が語ってくれたことを記憶している。長年にわたり「人種」問題の研究に携わってきた専門家によるアメリカ史の捉え方を知る上でも、広く読まれるべき書である。

黒崎 真（神田外語大学）

鵜殿えりか 著

『トニ・モリスンの小説』

(彩流社, 2015 年, 4,104 円)

本書はトニ・モリスンの 9 つの小説と 1 つの短編小説を、一貫して 2 つの観点から論じる研究書である。2 つの観点とは、小説において使われている、おとぎばなし、民話、わらべ歌、聖書、小説、歴史などの「物語の枠組み」という形式的な観点と、もう 1 つは内容に焦点をあてた、女どうしあるいは弱者どうしの「三角形のきずな」という観点である。著者はこの形式と内容がどのように共鳴しあっているかを鋭く考察しながら、それぞれのテキストを詳細に分析していく。

本書は 2 部構成となっている。第一部は初期の長編小説とモリスンの唯一の短編小説、すなわち、『青い眼がほしい』（1970）、『スーラ』（1973）、『ソロモンの歌』（1977）、『タール・ベイビー』（1981）、『レントァティーフ』（1983）を論じる。著者によると、これらの小説には共通した特徴がある。それは、作者はここで、黒人女性における女どうしのフェミニズムのなきずなを描いただけではなく、黒人女性および男性における同性愛的な結びつきを描くことにも挑戦している、ということである。それぞれの小説においては、おとぎ話や民話といった「物語の枠組み」が換骨奪胎され別の新しい物語へと作り直されていくと同時に、このような友情／愛のテーマが様々に展開し、差別社会における弱者どうしの結びつきの意味が探求される。

第二部がとりあげるのは『ピラヴィッド』（1987）以降の中後期の小説である。その特徴は、初期小説が弱者どうしの関係に焦点をおいていたのに対し、ここではアフリカ系アメリカ人の歴史が明確に前景化されていることにある。例えばそれぞれの小説においては、奴隷制時代（『ピラヴィッド』）、ハーレム・ルネサンス（『ジャズ』（1992））、第二次世界大戦後（『パラダイス』（1997））、公民権運動以降（『ラブ』（2003））、奴隷制以前の植民地時代（『マーシィ』（2008））といった時代が黒人の視点を通して描かれる。つまり、ここでは物語の枠組みとして「歴史」が用いられているのであるが、それは白人男性中心の視点による「大文字のアメリカ史」からマイノリティの体験した「小文字の歴史」へと見直されているのである。一方で、初期小説に見られる「三角形のきずな」のテーマは明示的ではなくなっているが、それはむしろ非顕在的な形で深化していると言うべきであり、だからこそ注意深い読みが一層必要となる。特に 1993 年のノーベル文学賞受賞以降、モリスンは一見歴史主義へと向かっていったように見えるが、テーマや意匠は初期から後期までほとんど変わっていないのである、と著者は指摘する。

黒人女性としてアメリカに生きるトニ・モリスンが、人種・階級・ジェンダー・セクシュアリティをめぐる人間関係をどのように捉え、どのように描いたかを見事に提示してくれる本書は、確かに読者をモリスン文学の新たな解釈の地平へと導いてくれるであろう。

松井美穂（札幌市立大学）

藤田文子 著

『アメリカ文化外交と日本』

——冷戦期の文化と人の交流——

(東京大学出版会, 2015 年, 6,372 円)

本書の副題に「人の交流」とある通り、著者は冷戦初期のアメリカで対日文化外交に携わった人々を丁寧に描き出すことによって、国家間の営みの中に人間の顔を浮き彫りにしている。それを可能にしているのは、本書が依拠している多彩な一次史料である。国務省や USIA の公文書はもちろん、アイゼンハワー図書館やロックフェラー・アーカイブ、オーラル・ヒストリー、新聞・雑誌記事から伝記・回想録まで、日米のありとあらゆる史料を駆使した徹底的な調査の上に、精緻な実証研究と豊かな人物描写が成立している。本書は今後、文化外交研究を志す者にとっての基本書となるであろう。

第 1 章～第 2 章では、第一次世界大戦から冷戦期に至るアメリカ文化外交の歴史と、占領期からポスト占領期の対日文化外交の軌跡が詳しく紹介されている。とりわけ、対日文化外交に携わった人物や「アメリカ文化センター」の活動内容に関する詳しい記述は、既存研究には無かった包括的な全体像を提供している。そこでは対日文化外交が「決して一枚岩ではなく、多様な側面をもつ多くの活動から成り立っていた」(p. 40) ことに光が当てられる。

第 3 章～第 7 章では、映画・文学・写真・音楽・知的交流など、文化外交の事例が幅広く取り上げられる。第 3 章は USIS 映画、USIS の資金援助を伏せた政治的メッセージ映画、そしてハリウッド映画を取り上げ、ハリウッド映画と USIS 映画は互いに補完的な関係にあったと分析している。第 4 章は、国務省派遣によるウィリアム・フォークナーの来日 (1955 年) に焦点を当て、アメリカ文学の地位向上には寄与したものの日米の相互信頼を育むには至らなかったという、成果の両面性を明らかにしている。第 5 章では、USIA が世界各地で開催したエドワード・スタイケンの「ザ・ファミリー・オブ・マン」写真展が、原爆写真をめぐる米国大使館との緊張関係をはらみながらも、人々にヒューマンイズムのメッセージを伝えたことを論じている。第 6 章は、「大統領緊急基金」によって来日した「シンフォニー・オブ・ジ・エア」「マーサ・グレーム舞踊団」をはじめとする芸術家たちに焦点を当てる。これらの企画が多様なアメリカ芸術を日本に紹介しただけではなく、共産圏からの芸術家派遣を活発化させるという効果も生んだことが明らかにされる。第 7 章は、国際文化会館の設立と日米知的交流計画の過程で、知日派アメリカ人と知米派日本人の間でさえ意見対立があり、これらの計画が日米の完全なコンセンサスの下で進められたわけではないことを指摘する。しかし一方で、日本のリベラル派とアメリカ政府は、日米相互理解を促進し「マルクス主義者が優勢を占める日本の知的風潮を変えたい」(p. 236) という思いは共有していたという。

第 8 章では、対日文化外交の限界と成果が改めて検討される。日米双方からもっとも高い評価を受けたのは「人と人との交流」(p. 253) であり、文化外交は「政治的效果」は乏しくとも、「アメリカに対する日本人の親近感をはぐくむこと」(p. 266) には貢献したと結論付けられる。(土屋由香 愛媛大学)

高野泰志 著

『アーネスト・ヘミングウェイ、神との対話』

(松籟社, 2015 年, 2,592 円)

信仰に熱心ではなかったヘミングウェイ。本書はこのイメージに異議を唱え、広範な作品研究からこの作家のキリスト教観の捉え直しを試みる。

序章にも指摘される通り、ヘミングウェイ研究には「奇妙な空白」(18) がある。多くの作品にキリスト教的影響が色濃く見られるにも関わらず、宗教性に関する研究が『老人と海』以外の作品について少ないのである。この空白に切り込んだのが本書である。

第 1 章「ニック・アダムズと「伝道の書」—オークパークとビューリタニズム」では、短編「インディアン・キャンプ」に潜む宗教をめぐる家族の問題から、この作家が幼少期に受けた宗教教育を考察する。

第 2 章「信仰途上のジェイクスコープス裁判と聖地巡礼」では、ヘミングウェイのカトリック改宗以前に描かれたカトリック教徒の主人公である『日はまた昇る』のジェイク・バーンズの描写から、この作家のカトリックに対する姿勢を分析する。

第 3 章「届かない祈り—戦争とカトリシズム」では、カトリック改宗以前からヘミングウェイが祈る主人公たちを描いていた事実に着目し、1920 年代の作品を中心にしながらこの作家にとっての祈りの意味を考える。

第 4 章「異端審問にかけられたキャサリン」では、『武器よさらば』においてヒロインが主人公の手を「触らないで」と拒否する一節に注目する。この場面をキリスト教絵画のモチーフ「我に触れるな (ノリ・メ・タンゲレ)」と重ねる独自の発想で、最初の離婚で生じたヘミングウェイの贖罪願望が含まれる可能性を提案する。

第 5 章「信者には何もやるな—出産と自殺の治療法」では、ヘミングウェイ作品における医学と宗教との関係性について、短編集『勝者には何もやるな』(1933) を中心に論じる。

第 6 章「革命家の祈り—政治と宗教の狭間で」では、ヘミングウェイの政治姿勢と宗教観が一貫しない理由について、『誰がために鐘は鳴る』に浸透する宗教的イメージを通して再考する。

第 7 章「サンチャゴとキリスト教マゾヒズム」では、ヘミングウェイ作品で繰り返される「主人公が痛みに耐える描写」とキリスト教的殉教モチーフとの関連性を指摘し、ヘミングウェイ作品の主人公に潜むマゾヒスティックな欲望に言及しつつ『老人と海』のサンチャゴを読み直す。

第 8 章「ニック・アダムズと楽園の悪夢」では、最晩年に執筆された未完原稿「最後のすばらしい場所」における楽園の意味を再考する。

終章「ヘミングウェイが見た神の光」では、「追い求めつつ完全な信仰にいたることのできなかったヘミングウェイの姿」(236) が強調される。

第 8 章で扱われる「最後のすばらしい場所」は、“The Last Good Country” が原タイトルである。この Country をあえて「場所」と訳した高野氏の判断について、納得のいく読後感であった。

あまり手のつけられていない分野に挑戦し、テキスト内の細かな描写を見逃さずそこから新しいヘミングウェイ像を提案していくという意味で、細やかさと大胆さを兼ね備えた意欲的な論考である。

(田村恵理 (石川県立大学))

Organization of American Historians 派遣来日研究者のお知らせ

2015 年度の OAH/JAAS Short Residency Program による派遣研究者が次の 2 名に決まりました。

このプログラムはアメリカ史を中心に、日本の大学院生、学部学生の指導と研究者の相互交流を目的とするもので、研究者は各大学に約 2 週間滞在します。研究者の専門領域、受け入れ校と担当者、滞在期間は以下の通りです。これらの研究者を招いて講演会や研究会を開催するご希望のある方は、できるだけ早い時期に受け入れ校の担当者と直接交渉し、この機会を有効にご利用ください。

Neil Foley (Southern Methodist University)

専門領域: Mexican American History

受け入れ校/担当者: 東京外国語大学/佐々木孝弘会員 (taksas@tufs.ac.jp)

滞在期間: 2016 年 6 月 3 日から 16 日まで

Madeline Y. Hsu

専門領域: Asian American History

受け入れ校/担当者: 立命館大学/小川真和子会員 (m-ogawa@fc.ritsumei.ac.jp)

滞在期間: 2016 年 6 月 1 日から 14 日まで

なお、このプログラムが 2017 年度も実施される場合、受け入れ校となることを希望される会員は 2016 年 5 月 20 日までに事務局 (office2@jaas.gr.jp) までご連絡ください。

国際委員会

新入会員

鈴木俊弘	一橋大学 (院)	史 民 化
小椋道晃	ウィスコンシン大学 (院)	文 芸 衆
ランダオ・サマンサ	昭和女子大学 (講)	文 ジ 化
本田浩邦	獨協大学	経 日 社
大橋陽	金城学院大学	経 史
福西恵子	ハワイ大学 (院)	化 芸 史
原真由美	関東学院大学 (講)	日 思 宗
関口洋平	ハワイ大学 (講)	文 衆 ジ
船津靖	共同通信社編集員兼論説委員	外 宗 日
奥田俊介	京都大学 (院)	外 史 教
青木耕平	一橋大学 (院)	文 化 史
志田淳二郎	中央大学 (院)	政 外 史
チョー・ウィリアム	オハイオ州立大学 (院)	日 経 衆
田村恵理	石川県立大学	文 ジ
ドハーティ・シンシア	西南学院大学	史 教
勝井伸子	奈良県立医科大学	文 化 史
蒲島郁夫	熊本県知事	政

*入会申し込み順、専門領域の略記については、PDF 版会員名簿作成用アンケートおよび学会ホームページに記載されている新表記法による

編 集 後 記

3 月初旬までの米大統領予備選・党員集会では民主党はヒラリー・クリントンが、共和党はトランプが優勢である。「トランプ旋風」もだが、民主党側で「民主社会主義者」のサンダースが若者の支持を受け健闘していることが関心をひく。世界と米社会を大きく揺り動かした「1968 年」

から 2 年後には 50 年を迎える。サンダースは 1960 年代に黒人市民権運動にも関与しており、国内の格差深刻化と学生ローンの重圧を憂慮するサンダース支持の若者が彼の 1960 代の足跡にも着眼し、この時代の米社会の変革の遺産をどのように考えているかも注目される。

(藤本博)

2016 年 4 月 15 日 発行

ア メ リ カ 学 会

〒231-0023 横浜市中区山下町 194-502

学協会サポートセンター内

Tel: 045-671-1525 Fax: 045-671-1935

http://www.jaas.gr.jp

発行人 松 本 悠 子

編集人 下 河 辺 美 知 子

印刷所 啓文堂松本印刷

〒162-0041 新宿区早稲田鶴巻町 565-12